

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K17279

研究課題名（和文）里親養育における里親と実子の意識とその支援のあり方

研究課題名（英文）The consciousness and support among foster carers and biological children about foster care.

研究代表者

山本 真知子（YAMAMOTO, Machiko）

大妻女子大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：10771199

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究における研究成果は主に大きく2点である。1点目として、国外の実子の支援に関する視察を行い、日本において実子支援をするにあたっての取り組み方や課題等を明らかにすることができたことである。2点目として、実子と委託児童を育てている里親と委託児童とともに生活をしてきた実子に着目することで、今後の里親養育や里親支援においての里親や委託児童、そして実子の支援に関する視点を明らかにすることができたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、日本において里親や養子縁組といった家庭養護の促進が行われており、里親支援やフォスティング機関の充実が求められている。しかし、これまで里親の実子に関しての視点は支援においてほとんどなく、実子の声も十分に明らかになっていなかった。また、実子を育てている里親への着目もほとんどなかった。本研究の成果を明らかにすることで、これまで見落とされてきた実子を含めた支援を行うことができる。また、海外の実子支援を視察することで、国内の今後の実子支援における動きや考え方を知り現場の支援者の方々と協働していくことができる知見を得られた。

研究成果の概要（英文）：The research results of this study are mainly twofold. First, the study is able to clarify the approaches and issues in supporting biological children in Japan by conducting observation tours of support for biological children outside Japan. Second, interviews with foster carers who are raising their own children and foster children, and their own children allowed us to identify perspectives on support for foster carers, foster children, and their own children in future foster care and foster care support.

研究分野：子ども家庭福祉

キーワード：里親 里親の実子 家庭養護 社会的養育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究開始当初の背景

保護者の精神疾患や虐待などの理由により実親とともに生活できない社会的養護のもとにおかれている児童が増加している。厚生労働省によれば平成 25 年度末の時点で社会的養護の対象児童が約 4 万 6 千人いるとしている（厚生労働省 2014）。これらを踏まえ、日本において里親やファミリーホーム（以下 FH）の家庭養護を今後増やす目標が掲げられ、今後の中長期的な計画目標として、社会的養護の 3 割を家庭養護とすることも示されている（厚生労働省 2014）。一方で里親支援の拡充のため里親支援機関事業や児童養護施設・乳児院に配置された里親支援専門相談員などの質の確保も始まっている。しかし、里親の数と里親の支援の内容はまだ充分ではないため、その対策も急務であると考えられる。

一方、里親の血縁関係にある子ども（以下：実子）に関する研究は日本において始まったばかりであり、2013 年に厚生労働省から発出された「里親及びファミリーホーム養育指針」の中において、実子への配慮について述べている（厚生労働省 2013）。しかし、国外では 1970 年代から里親養育を困難とさせる理由の一つとして実子の存在を挙げ、近年イギリス、オーストラリア、スウェーデン等の国々で実子への支援の必要性が高まっている（Hojer and Sebba et al 2013）。実子が委託児童と同じように 18 歳未満の児童である場合、実子も子どもの権利を有している。しかし、実子は委託児童と同じ里親家庭で育つ場合であっても支援の対象にはなっておらず、国内において里親や FH においての研修で実子への言及は極わずかであり、面接や支援をする場合ほとんどない。

これまで本研究者は実子に着目し研究を行ってきた（山本 2013a;2013b;2015）。実子へのインタビュー調査から、実子が成長過程で様々な困難を抱えることがあり、実子が相談できる場がないこと、家族内でも実子が孤立する気持ちを持つことが明らかになった。

実子に関しての調査は行われているが、実子を養育している里親に限定した調査は行われていない状況である。

2．研究の目的

研究の目的は主に 3 点である。

目的 実子と委託児童を共に養育した経験のある里親にその養育の内容や実子と委託児童の養育に関する意識、インフォーマル支援やフォーマル支援に関して明らかにする。里親側の意識を明らかにすることで、里親になった動機、委託児童と実子を養育する場合の困難さ、必要な支援を明らかにするとともに、家族を再構成する過程や捉え方の違いを示すことができると考えられる。

目的 本研究においては実子が両親である里親に対しどのような意識を持ち、親子関係の捉え方を明らかにしていくことを当初の目的としたが、実子同士のピア・サポートの必要性や重要性に関して明らかにすることも併せて目的としている。

目的 国外の一部の機関において実子支援を行っているオーストラリアでは、エビデンスをもとに実子支援プログラムを開発している（Berry street & West care 2012）。その機関を視察するとともに、プログラムを開発した経緯、里親家庭の中での親子関係の捉え方、支援のあり方などを明らかにする。

3．研究の方法

目的 に関しては、委託児童と実子を共に養育した経験を持つ里親と委託児童と共に生活したことがある実子へのインタビュー調査を行った。

調査協力者は里親 9 名で半構造化面接を行い、実子 3 名はグルーピングインタビューを行った。

目的 のオーストラリア・イギリスの里親支援機関において、実子を含めた里親支援や研修等の現状の把握、支援の内容の視察を行う予定であったが、感染症の関係で、現地視察はオーストラリアのみとなった。

4．研究成果

研究成果として、以下の 3 点が挙げられる

国外の調査に関しては、新型コロナウイルスの拡大の影響で当初の予定であったイギリスへの視察を行うことができなかったが、実子支援のプログラムを行っているオーストラリアの団体への視察を行うことができ、プログラムを実施する上での詳細な状況や課題等を知ることができた。また、視察以外でも論文や実際の冊子等から実子支援について、論文としてもまとめ報告することができた。

「里親家庭における実子への支援の現状と課題」の論文の中で、実子支援の課題として、第一に実子への関心の低さが挙げられる。実子自身が、「実子が支援を受ける立場」という認

識が非常に低く、また里親の実子という立場を理解されないで育っているケースが多くみられる。第二に支援の実施方法の困難さが挙げられる。その理由として、ピア・サポートを行う場合実子の当事者が複数人集まることが重要であるが、年齢もさまざまで、住んでいる地域も離れている場合、集まる機会を作ることが容易ではないということである。第三に実子支援を担当する機関や人材に対する課題が挙げられる。里親家庭の少なさや実子支援の関心の低さとも関連するが、実子支援を行う機関や人材がまだ日本では十分確保できないことを指摘した。

インタビュー調査においては、9名の里親へ半構造化面接を行った。その結果から里親側が実子と委託児童を育てる上で様々な感情を持ちながらも、実子と委託児童の養育を行う利点があると語っていた。また、同じように課題もあり、実子への支援がないことなどをあげ、支援が十分でない中で里親が委託児童や実子への配慮等を行い、工夫をしながら養育を行うようにしていた。

実子へはグループインタビューを行い、それぞれの実子として育った環境下について振り返るとともに、ピア・サポートの重要性についても明らかになった。実子同士の出会いや語り合いは実子にとって大きな経験であり、今後の実子の支援の可能性とその必要性を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山本真知子	4. 巻 135
2. 論文標題 里親家庭における実子への支援の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 旭比呂子 山本真知子 元藤透	4. 巻 8
2. 論文標題 「実子のケア～参加者の語り合いを通して考える」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『社会的養護とファミリーホーム Vol.8』	6. 最初と最後の頁 80-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本真知子	4. 巻 18
2. 論文標題 里親・ファミリーホームの養育者の実子への支援 ピア・サポートの支援に向けて	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 人間関係学研究	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本真知子	
2. 発表標題 委託児童と実子を養育する里親の意識	
3. 学会等名 第22回日本子ども家庭福祉学会	
4. 発表年 2021年	

1．発表者名 山本真知子
2．発表標題 里親家庭の実子の意識
3．学会等名 「養子と里親を考える会」140回（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 山本 真知子	4．発行年 2019年
2．出版社 岩崎学術出版社	5．総ページ数 216
3．書名 里親家庭の実子を生きる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

上記の研究発表に加え、ファミリーホーム分科会の発言者、実子当事者が集まるピア・サポートグループの実施や実子支援に関するホームページの作成等を行った。
--

6．研究組織			
	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------